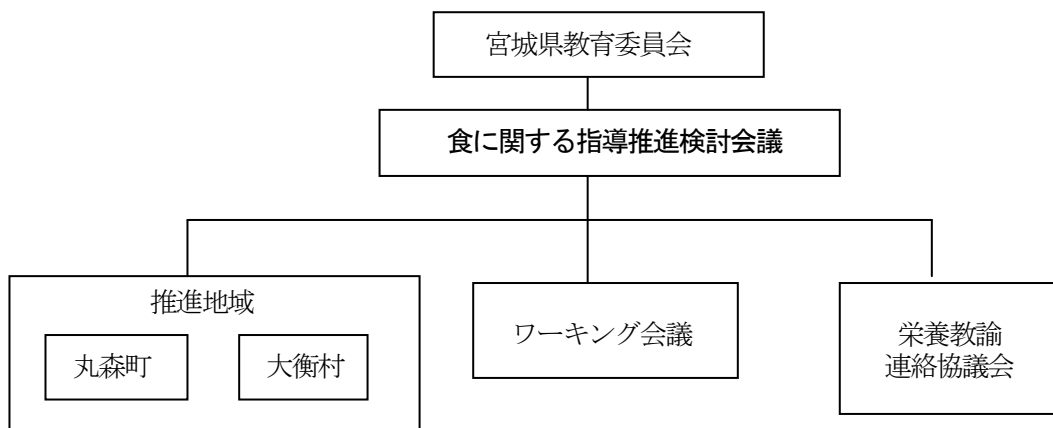


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	宮城県
再委託先名	丸森町, 大衡村

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 学校教育活動全体で取り組む食に関する指導を充実させるための方策

(1) 実態調査の実施

- 調査内容：食に関する指導の全体計画の整備状況等についての実態調査を実施した。

(2) 食育推進検討会議の開催（年3回）

本事業の取組を広い視野で検討するとともに、本県の食育推進の方向性について協議した。会議を通して、推進地域間の情報交換が図られるとともに、教育事務所と連携しながら事業を進めることができた。

今年度は、前年度食育推進地域の代表者を委員に加えることにより、推進地域において当事業が円滑に進められるようサポート体制の強化を図った。

<ワーキング会議の開催>（年3回）

- 保護者向け食育推進啓発リーフレットの作成・配布

栄養バランスのとれた朝食の良さや内容について理解を深め、望ましい食習慣の形成を促す内容のリーフレットを作成し、小学校1年～3年生の家庭に配布した。

これまで、リーフレット等の配布物は、配布して終わりになっていたという反省から、今回は活用方法をアンケート調査により把握するとともに、今後の活用（案）等について意見や要望を募り、次年度以降の取組に生かせるよう配慮した。

また、リーフレット裏面のチェックシートについては、実践後のチェックシートの送付を呼びかけ、送付のあった学校には「食材王国みやぎ」のキャラクターのイラストの入ったメッセージカードを返信し、双方向の取組となるようにした。

(3) 研修会の開催（年2回）

学校給食を「生きた教材」として活用した食に関する指導の推進を図っていくためには、その土台となる安全な学校給食の提供が不可欠であることから、衛生管理の徹底を図るための研修を行った。また、地域の産物を活用した学校給食の推進を図るため、生産者・流通業者・行政・学校（共同調理場）等との連携のあり方や学校給食と授業とのつながりを持たせた食に関する指導の実践について、講演や実践発表を通じた研修を行うことにより、食に関する指導及び学校給食の普及・充実を図った。

(4) 栄養教諭連絡協議会の開催（年1回）

食に関する指導をどのように進めたのか、栄養教諭間で実践のプロセス等について情報の共有化を図った。また、食育の推進に当たっての現状と課題について協議し、課題解決及び今後の実践の一助とした。

(5) 推進地域の指定

栄養教諭が配置されている地域（2地域）を推進地域に指定。各地域の実態に合わせたテーマを設定し、学校・家庭・地域の連携を図りながら課題解決に向けた実践的な取組を行った。

※ 具体的な内容については、推進地域からの報告によるものとします。

テーマ1～3に共通する具体的計画

数字で変化のあった事項について

1 実態調査の結果について

- ・食に関する指導の全体計画の整備状況

	H20.10.1 現在		H21.5.1 現在		H22.5.1 現在
小学校	87.8%	→	96.2%	→	99.3%
中学校	78.4%	→	89.5%	→	95.8%

2 保護者向け食育推進啓発リーフレットについて（教職員へのアンケート調査の結果等）

[活用方法]

- ・朝の会、帰りの会等の時間に内容を説明しながら配布したケースが最も多かったが、中には、学級活動等、授業で活用したケースもみられた。

[リーフレット裏面（チェックシート）の活用状況]

- ・親子で一緒に一週間取り組んでもらえるよう配布したものではあるが、学年やクラスで1週間取り組んだり、学級活動等の授業の中でワークシートとして活用したり、学校において有効に活用された事例もみられた。
- ・1週間取り組んだケースについてチェックシートの送付を呼びかけたところ、87校（約2割）からの送付があった。

[教職員からの感想]

- ・1週間取り組んだだけで、子どもたちも家庭でも少し意識が高まったように思います。給食の残量が減りました。続けることが、やはり効果的だと思いました。

3 研修会の開催について

<「食に関する指導」に関する研修会>（参加者へのアンケート調査の結果）

- ・講義については、参加者の8～9割が「とても役立つ」「役立つ」内容であったと回答している。
- ・実践発表（当事業の推進地域の実践発表を含む）については、参加者のほとんどが「とても参考になった」「参考になった」と回答し、約7割が「ぜひ取り組みたい」「できれば取り組みたい」と回答している。

[研修会参加者の感想]

- ・栄養教諭・栄養士さんとの連携がとても大切だということ、こちらから（教諭の側から）の積極的な働きかけがあってこそ連携できるのだと実感しました。
- ・担当が英語科なので、今日はすべてが新鮮でした。午前の食育の講演は、今月授業実践を控えているので、参考になる点が多くありました。

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

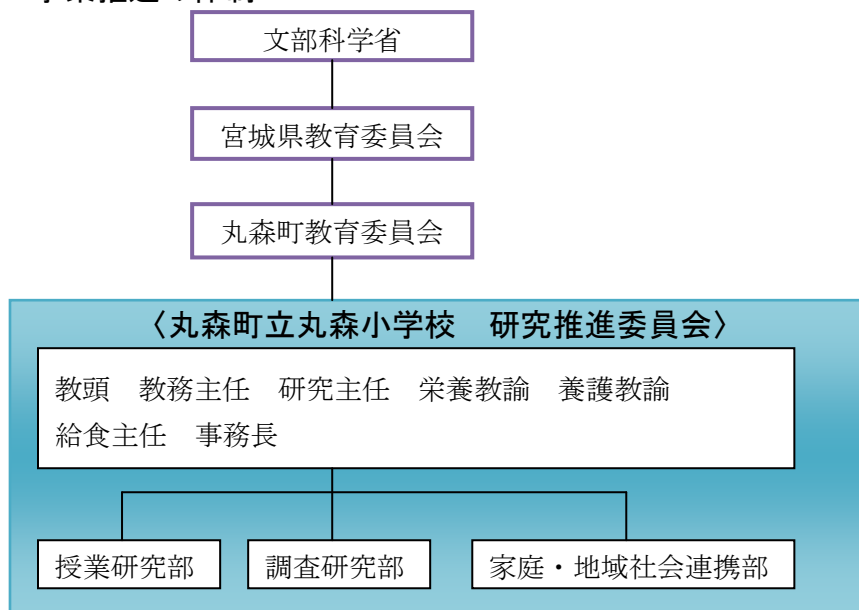
- 1 指導計画について
 - ・県教育委員会としては、今後、指導計画が適切に作成・実施されているかについて、実態の把握に努めていく必要がある。
 - ・各学校においては、今後も食の重要性、心身の健康、食品を選ぶ力、感謝の心、社会性、食文化の6つの内容を踏まえ、各教科、特別活動、総合的な学習の時間等との関連を図りながら、学校や地域の実態に応じたものとなるよう、実践をとおしてさらに内容を検討していく必要がある。
 - ・発達段階に応じた継続的な指導としていくために、幼稚園・小学校・中学校の連携をさらに図っていく必要がある。
- 2 指導内容の充実について
 - ・食育推進検討会議等を通して、県としての食育推進の方向性を検討していく必要がある。
 - ・栄養教諭連絡協議会を通して、栄養教諭を中核とした食育推進の成果と課題の把握に努めていく必要がある。
 - ・食に関する指導の進め方等について、教職員や学校給食関係者を対象とした研修会を開催するとともに、情報発信を充実させていく必要がある。

栄養教諭を中核とした食育推進事業

事業報告書

都道府県名	宮城県
推進地域名	丸森町

1. 事業推進の体制



- 〈検討委員会〉**
- 丸森町教育委員会
 - 丸森町学校給食センター
 - 丸森町健康日本21地域計画推進委員会（げんまる21）
 - J Aみやぎ仙南丸森地区女性部
 - 丸森町農産物生産組合
 - 丸森小学校食農応援隊
 - 丸森小学校PTA代表
 - 関係小・中学校長

2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科等における食に関する指導の充実のための方策

○指導計画の検討・作成

- ・「食育に関する指導目標」「食に関する指導の全体計画」「各学年の食に関する指導計画」を検討，作成し教育課程に位置づけ，全教職員の共通理解のもとで食育の推進に取り組むことを確認した。指導計画を検討，作成することにより，教育目標と「食育」との関係や，食に関する6つの指導目標に関わる指導観点が明らかになり，授業研究や日常の指導に生かすことができた。



写真—①



写真—②



写真—③

○各教科・領域等における指導

- 研究主題を「食の大切さを知り，望ましい食習慣を身に付ける子どもの育成」とし，各学年で授業実践，研究授業に取り組んだ。
- ・各教科・領域等における指導を通して，「食」に対する興味・関心・意欲を高め，視点（食に関する指導の目標①～⑥）に基づいた指導の充実を図った。研究授業を重ねるごとに，食に関する指導を各教科，領域の中で，いかに指導していくかが明確になってきている。

（視点：①食事の重要性 ②心身の健康 ③食品を選択する能力 ④感謝の心 ⑤社会性 ⑥食文化）

- ・栄養教諭が授業に入ることにより，専門的知見から，児童の食生活に有用な知識や情報を提供することができた。その結果，食に対する意識が高められ，食生活を自分のこととして主体的に考えながら，自分の生活に生かすことができる児童の育成につながった。

〈実践例〉

- 地場産物を活用した学習（家庭科）〈写真①〉
- 食育推進ポスター制作（図工科）〈写真⑥〉
- 収穫した作物の調理（家庭科，生活科，総合的な学習の時間）
- 食育推進の標語づくり（国語科）〈写真②，④，⑤〉
- 収穫や作物を題材とした絵画（図工科）
- 発達段階に応じた学級活動〈写真③〉



写真—④



写真—⑤



写真—⑥

○給食の時間における指導

- ・「給食の時間における食に関する年間指導計画」及び「給食の時間における指導計画」を作成し、各担任が給食当番の衛生管理や給食の食材などについて指導内容を確認するなど給食指導体制の整備を進めることができた。
- ・日常の給食の時間における計画的・継続的な具体的指導を通して、食の重要性の理解と食生活の改善を図った。
- ・栄養教諭による学級訪問の実施
食育の推進を図るために町内12校の小、中学校を訪問し、児童生徒の食事の様子を把握しながら食事のマナーや栄養についての指導をしてきた。
- ・個別指導
食物アレルギーや偏食等、家庭と連携しながら個別の指導にあたった。



【栄養教諭による授業】



【栄養教諭の学級訪問】

このような取り組みから、献立や食材への関心が高まり、栄養を意識して食べる児童がふえている。残さず食べるよう指導したことによって残食も減少の傾向にある。

○外部講師による教職員の研修

7月22日（火）に宮城県大河原教育事務所 佐藤亨 指導主事を招き、「食育に係る今日的課題と学校における食育指導の在り方について」の校内研修を実施した。



【研修会の様子】

テーマ2 栽培活動を通じた地域の産物・食文化等の理解を促進するための方策

○学校農園での作物栽培活動

- ・カボチャ (1年)
- ・サツマイモ, ミニトマト (2年)
- ・枝豆, ヤーコン (3年)
- ・枝豆, キュウリ, ヤーコン (4年)
- ・大豆, バケツ稲栽培 (5年)



大豆を使ってみそ作りを計画 (JAの指導) 【食農応援隊の方の指導】

【学校農園：にじいろ農園】

- ・里芋, ジャガイモ, ヤーコン (6年) 地場産物ヤーコンふりかけを作り, 販売を計画
- ・きゅうり, にんじん, じゃがいも等 (特別支援学級)
- ・ヤーコン, 枝豆 (羽出庭分校)



【バケツ稲づくり】

・食農応援隊のご指導, ご協力をいただきながら, 子どもたちはうね作り, 種まき, 苗植え, 水やり, 除草作業, 収穫などの栽培活動を体験することができた。普段食べている食物を自分たちで栽培して収穫することで生産者の苦労や食物の大切さを学ぶことができた。また, 収穫したものを自分たちで調理して食べることにより, 食べることの喜びや感謝の気持ちを持つことができた。



【きゅうりのわらしき】



【収穫したきゅうりを調理】



【さつまいもの苗植え】



【かぼちゃの収穫】



【畑の草取り】



【枝豆の収穫】

テーマ3 家庭、地域への効果的な普及啓発を行うための方策

○家庭・地域社会との連携

- ・食に関する実践や情報を「食育だより」で発信することで、食に対する意識の高揚が喚起されたり、家庭・地域社会との連携の充実が図れたりすることができた。



【食育だよりにじいろ通信】

- ・給食試食会の実施
祖父母参観や学年PTAの機会に給食の状況や、意義について理解してもらうために、給食の試食会を実施した。



【給食試食会】

- ・「食育コーナー」等の環境整備

校内に「食育コーナー」を設け、食に関するクイズや体験コーナーを工夫することで、児童の食に関する興味・関心を高めることができた。



【食育掲示コーナー】



【箸の使い方体験コーナー】



【食育クイズコーナー】

○外部機関の食に関する応募や行事への積極的な参加（地域に対して食育を啓発）

- ・みやぎ食料自給率向上県民運動の標語づくり

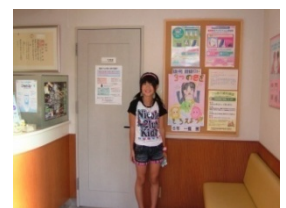
作品抜粋 「宮城産 自然の恵み たくさんだ」 6年児童

「新鮮で 安全安心 宮城産 」 6年児童

「食卓を 囲むご馳走 宮城産 」 5年児童

- ・食育推進ポスターやパネルを地域の施設10カ所に掲示を依頼し、普及啓発を図った。

【食育ポスターを地域に掲示】 →



- ・第4回食育推進県民大会において食育の実践をパネル展示

平成22年11月 9日（火）

【白石市文化体育活動センター】 →



○PTA教育講演会の開催

PTA主催により、食育をテーマに教育講演会を開催した。親子で講演を聴くことにより、より一層食に対する大切さを知り、関心が高められた。

演題「音楽を通して食育を考える」

講師 みやぎ食育アドバイザー 飯淵 由美 氏



テーマ1～3に共通する具体的計画

○児童へのアンケート実施

給食については、「好き嫌いがある」と回答している児童が73%と多く、また、野菜を使った料理の残食率も高くなっている。

これらの実態の背景には、児童が自分の食生活に関心を持ち、改善を図ろうとする態度や実践力が十分に育っていない実情があり、本校の食育の課題となっている。

○保護者へのアンケート実施

食事については、野菜などの栄養をバランスよくとろうという意識が高いが、食塩やカロリーのとりすぎに対する意識はそれほど高くない。

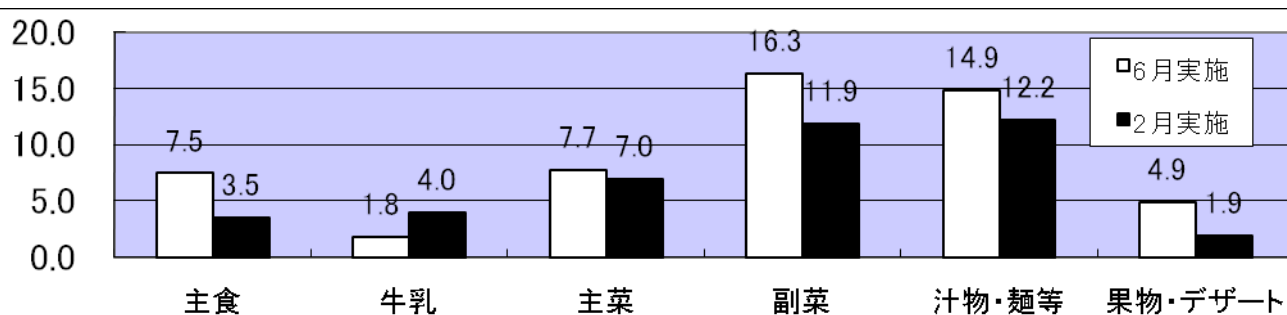
栄養バランスを気にして食事を作っているが、偏食傾向や好き嫌いのある児童が多く、保護者も頭を悩ませている。また、間食や清涼飲料水を多くとる児童も多く、学校としても取り上げて指導するとともに、保護者への啓蒙も必要である

○学年懇談会において食に関する学校での取り組みを紹介したり、家庭や地域での取り組みや活動などについて話し合うことができた。これまでの取り組みを通して、保護者の食に対する関心や意識の高まりが見られるようになってきている。

○地域へ向けた食に関する学校での取り組みの発信として、食育パネルを丸森町役場ロビーへ展示した。

数字で変化のあった事項について

○給食の残食率の比較



- ・牛乳以外の全項目において、6月に比べて2月に実施した際の残食率が低い。1年間を通しての食育の効果が表れたのではないかと考えられる。
- ・牛乳については、調査時期が暑い6月と寒い2月であり、寒い時期には多く残る傾向があることから、2月に残食率が高くなっていると考えられる。
- ・学年別にみると、中・高学年はほとんど残さず、よく食べており、低学年は食べられる量や時間などの関係もあるのか、やや残る傾向が見られた。
- ・ごはんは、やはりカレーやそばろなどかけるものがあるほどよく食べていたが、それ以外のおかずの日でも、2月の残食率は低い結果となった。
- ・肉類に比べて魚類の残食率はやや高いが、それでも魚類も6月に比べて2月の残食率は下がった。
- ・和風の煮物はやや残食率が高かった。
- ・残食率が減少した背景には、「食」に対する興味や関心を持ち、感謝の気持ちを持って食事をいただくことができたことが一因と思われる。

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

○指導計画の検討・作成

- ・「食育に関する指導目標」「食に関する指導の全体計画」「各学年の食に関する指導計画」を作成し、全教職員で指導することにより、食育の推進を着実に進めることができています。

○各教科・領域等における指導

- ・栄養教諭が担任とTTで授業をすることにより、専門的知見から、児童の食生活に有用な知識や情報を提供することができた。その結果、食に対する意識が高められ、食生活を自分のこととして主体的に考えながら、生活に生かすことができる児童の育成につながった。
- ・食育を校内研究に位置づけ、研究主題を「食の大切さを知り、望ましい食習慣を身に付ける子どもの育成」とし、各学年で授業実践、研究授業に取り組むことで発達段階に応じた効果的な指導を展開することができた。
- ・地場産物を活用した学習は児童の関心・意欲を高める学習につながっている。
- ・食農応援隊のご指導、ご協力をいただき、充実した栽培活動を体験することができた。

○食育推進事業検討委員会による会議において、事業内容等の検討を行うことで、活動内容の充実が図られた。

○食育推進事業検討委員へ食育だよりを配布し事業についての発信をすることで、適切な助言をいただき活動に生かすことができた。

○食に関する実態調査の結果の分析を通して、本校の児童の実態が明らかになり、その改善への手だてが検討され、研究授業や日常の指導に生かすことができた。

○給食時の放送で食材、栄養についての放送をすることにより、献立への関心が高まり栄養を考えて、少しでも口にしようとする児童が増えた。

○学級活動で行った「いろいろな野菜を食べよう」や「赤、黄、緑を食べよう」について、ワークシートを使いながら、1週間チェックするようにした。完食できるようになった児童や残さず食べようとする児童が増えた。

○栄養教諭が「給食ができるまで」の話しを写真や実際の道具を使って指導したことで、給食センターの方々など、給食を作っている人に対する感謝の気持ちを持つことができた。

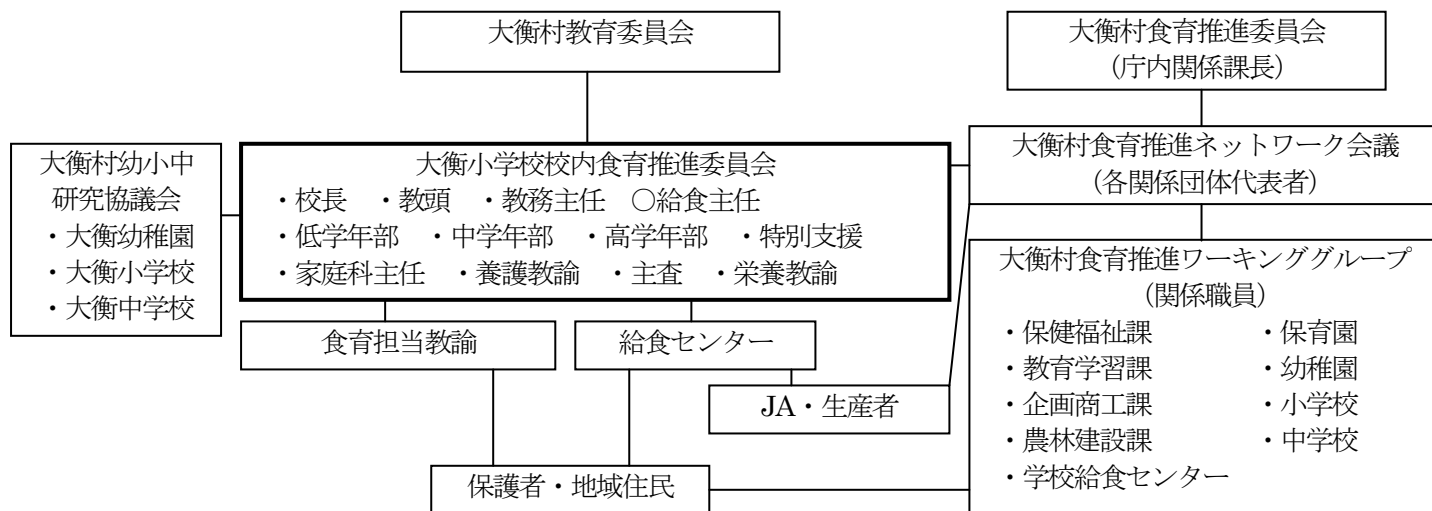
今後の課題（今回の事業により新たに見えた課題など）

- ・「給食の時間における食に関する年間指導計画」及び「給食の時間における指導計画」に基づき、より一層給食指導の充実を図っていく必要がある。
- ・日常の給食の時間における計画的、継続的な具体的指導を通して、食の重要性の理解を深め食生活の改善を図る必要がある。
- ・児童による自己評価や相互評価等により、食生活への意識を高め、自己管理能力を育成する指導を考えていきたい。
- ・「食育」に関する方向性がこれまでの実践を通して明らかになってきている。今後は各学年・学級で系統的にかつ計画的に「食育」の指導ができるように、各学年毎の指導計画を検討する必要がある。
- ・給食の時間や各教科・領域の中でより「食育」の実践を深め、保護者との連携と協力を得ながら、児童の食生活・食習慣を改善し、食を通して主体的に生きる児童の育成をより一層図る必要がある。
- ・様々な活動に興味を持ち取り組むことはできたが、定期的に指導の状況进行评估するとともに、工夫改善を図りながら、今後の実践に生かすことが必要である。

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業報告書

都道府県名	宮城県
推進地域名	大衡村

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科等における食に関する指導の充実のための方策

1 栄養教諭と連携した食に関する授業実践

- *6年生での「お弁当づくり」を念頭に置いて、発達段階に応じて計画的な授業実践を行った。
 - ・低学年は、栽培活動と収穫祭を通して色々な食材と触れ、調理の活用の仕方などを学んだ。
 - ・中学年は、食と健康について考える機会として「おやつのとりの方」について学んだ。
 - ・高学年は、調理の実践として、5年生では1品、6年生では1献立作れるようになることを目指した。

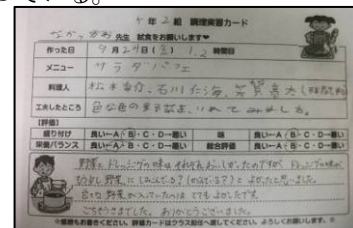


《4年生「砂糖の働き」》 《5年生「サラダパフェ」》 《6年生「ごはんのみそ汁」》 《6年生「自分合の食事の量を知ろう」》 《6年生夏休み食育課題》

◎お弁当作りは夏休みの課題として全員が取り組み、実践力が身に付いた。保護者の感想では、子どもを見直し励ます様子が見られ、それがさらに児童にとって自信につながったようだ。自主勉強でも取り組む児童がいた。

- *授業にはできるだけ、体験活動を取り入れ、児童の興味関心を引き出すよう工夫している。体験活動を取り入れることが、児童が自分の考えをもち発表する手立てにもなっている。

- *調理実習の際には「調理実習カード」を活用しクラス担任以外の先生にも試食していただいている。カードには、評価と感想を書いてもらう。実習したことへの満足感とともに、感謝される喜びも感じさせることができ、家庭での実践につながっている。



- *協力校での授業実践

中学校3年生と幼稚園年長児へ、「リクエスト給食を考えよう」という同じ主題の授業を行った。中学校では、班活動でテーマに合わせた献立づくりをし、プレゼンテーションを行った。幼稚園では具体的な献立や写真を示し、「食べたいのはどっち」と楽しく選べるようにしたりと、指導内容を工夫した。また、小学校

では、学級担任の指導のもと、お弁当作り等で学んだことを生かし献立づくりに取り組んだ。中学校の実践後の感想では、テーマに合った献立を考えるために班のみんなの知識を持ち寄ったり、パソコンで調べたり、クラスにインタビューをしたりする姿が見られ、誰かのために食事を考える楽しさを感じた人、食事を作ってくださる方への感謝の気持ちを持った人、自分の食事に野菜が足りないことに気づいた人等があり、卒業を前に、食べることの大切さを考えるよい機会になった。また、一生懸命考えた献立が、実際の給食として実現したことで、実践を通して感じた思いを更に強めることができた。

2 情報の共有と、指導力向上のための取組

- * 幼・小・中研究協議会において、各学校の先生方に食育の授業を見ていただき、研究協議を行った。
- * 黒川郡教育研究給食部会でのT T授業の提供。(家庭科部会と合同授業研究)
5年生 総合的な学習の時間「地産地消と郷土料理」
- * 指導主事訪問でのT T授業。
4年生 学級活動「砂糖の働きと体に必要な砂糖の量を知ろう」
- * 校内研究において他の先生方の授業参観。研究協議にも参加した。
- * 栄養教諭は授業後自己評価を行い、評価をもとに学級担任からの指導助言をもらっている。



3 給食に関する指導

- * 給食献立に関すること…毎日の給食に意味を持たせることで、「知りたい」「おもしろい」という興味を引き出し、「食べること」自体に関心を持たせた。
 - ・ 毎月11日を「はしの持ち方練習メニューの日」、18日を「カミカミメニューの日」とし、テーマに沿った給食を提供している。指導用紙芝居を作成し、毎月、各学校で活用した。
 - ・ 毎月の献立に「旬野菜のみそ汁」を入れ、地場野菜や旬の野菜たっぷりのみそ汁を提供した。
 - ・ 幼・小・中学校の行事をできるだけ把握し、行事に合った給食の提供にも気を配った。(校外学習など)



(はしの持ち方練習メニュー)



(カミカミメニュー)



(サザエさん給食と旬のみそ汁)

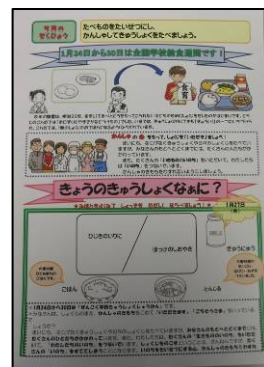


(2年蒲鉾工場見学・煮込みおでん)

- ・ 年2回給食センターにおいて、生産者との出荷者会議を行い交流を深めている。

* 給食時間の指導に関すること

- ・ 毎日、献立についての資料を掲示し、それをお昼の校内放送でも流し、全校に伝えた。同じ資料を、幼・中にも配布し、給食時間の指導に役立てた。給食センターにも資料を掲示することで、調理員の意識も高まった。
- ・ 栄養教諭が、給食時間に各学級を訪問し、給食の様子を観察や指導を行い、記録をつけている。継続して行うことで児童の実態の把握ができ、担任から相談された偏食のひどい児童に対しての声掛け指導なども行うことができた。幼稚園職員とも連絡をとり、幼稚園の時の様子を聞いて、指導の参考にしている。
- ・ 特別な献立や、地場産品を使った献立の時には、調理員さんたちが給食を作っているようすや、地場産品の納品の様子などを写真に撮り、その日の給食に間に合うよう資料を作り、各クラスへ配布している。協力校へは翌日配布している。今食べている給食のことを知ることで、子どもたちが感謝の気持ちを表したり、残さないように食べようとする意欲につながっている。また、給食センター職員・調理員さんたちにも配布することで、給食指導に対する理解と協力を深め、給食作りへの意欲につながっている。



(毎日の献立の資料)



(給食作りの様子の紹介)

テーマ2

栽培活動を通じた地域の産物・食文化等の理解を促進するための方策

1 学校農園での栽培活動と収穫祭

*各学年毎に栽培活動と収穫祭を実施した。

1年	ポップコーン・枝豆	4年	へちま・梅・だいこん	棚枝豆	さつまいも、枝豆
2年	ミニトマト・さつまいも	5年	米		
3年	夏野菜(トマト・なす・ピーマン等)	6年	じゃがいも		

・業務員さんやJAの職員の方の協力ももらいながら、種まき、苗植え、水やり、除草作業、収穫など、栽培活動を行った。栽培しながら、収穫祭の計画を立て、野菜のおいしい食べ方や栄養、郷土料理についても学習した。活動には、栄養教諭も積極的に関わってきた。

【3年生の「夏野菜ピザをつくろう」活動の流れ】

⇒関連しておやつについて親子で学び「食と健康」について考えた。



(苗植え)



(収穫)



(授業観「ジュースのあひねり」)



(夏野菜ピザ「読図作り」)



(学年行事ピザ作り)



【5年生の「稲作体験」活動の流れ】

⇒学芸会の劇「しあわせの島」とも関連させ「郷土愛」について考えた。



(田植え)



(学芸会「しあわせの島」)



(総合「地産地消と郷土料理」)



(生産者さんとの交流給食会)



(稲刈り)



(おにぎり作り)

テーマ3

家庭、地域への効果的な普及啓発を行うための方策

1 給食だよりの充実・学校だよりの連携

*「大衡村学校給食センター食に関する指導年間計画(小学校食に関する指導年間計画と同じ)」の月目標を基本とし、季節や行事に合わせ、興味深く読んでもらえる工夫をしている。

*村の食育推進計画との連携も図っている。

2 生産者さんとの交流給食会の開催

*栄養教諭とJA職員が協力し、小学校での地場野菜生産者やJA職員との交流給食会を11月に行っている。児童から感謝の気持ちを表したり、生産者さんが野菜を作ることの生きがいを話したりする和やかな場となった。



3 給食試食会の開催

*1年生保護者に対する給食試食会を行い、給食について理解を深めた。また、児童への食育指導の様子なども参観していただくことができた。

4 村の食育推進記念講演会との連携

*村の講演会のテーマが「‘弁当の日’が学力を育てる」となり、お弁当の日の活動を広めた竹下氏の講演と決まった。会場には6年生の「私が作ったお弁当」5年生の「サラダパフェ」「栄養教諭のクラス訪問の記録」などを掲示した。保護者や地域の方々に本校の食育の取組を知ってもらうことで、活動がより深まることを期待する。



5 食育コンサート「おいしい♪しあわせコンサート♪」の開催

*昨年、村の「家庭教育運営委員会」主催で行った講演会と同じ講師を招き、校内マラソン大会(授業参観デー)の日の午後、食育コンサートを開催した。食育コンサートには、全校児童のほか、保護者や、食育推進ネットワーク委員の方にもお越しい



きょうは、たべものことが、いろいろなべました。しゅよく・しゅさいふくさいがすこしわかったのでよかったです。リバーズファイブのみなさんのうたごえがとてもきれいだかったです。(1年生)

ただいた。児童にとっては、1日を通して「運動」と「食」について考える、充実した1日となったようだ。

また、食育コンサートの中で教えていただいた歌「いただきます♪であさごはん」のCDを給食時間のBGMで流し、2月に行った児童集会「保健委員会の劇『朝ごはんをたべよう』」にも活用するなど、継続した指導を行った。

村民に配布したリーフレットでも、「早寝・早起き・朝ごはん」について取り上げ、児童の実態と学校での取組を紹介し、家庭や地域への意識付けも図った。

6 新入学保護者説明会での「食育講話」

*村の生涯学習課からの依頼で「朝ごはん」と「食の自立」についての講話を行った。

私は今まで、朝ごはんを食べなくても勉強はできると思っていました。けれど、コンサートをみて、大事だということがよくわかりました。コンサートをみる前と後では変わりました。これからは残しません。
(5年生)



(コンサートの様子と感想)



(保健委員会による劇)

テーマ1～3に共通する具体的計画

実践中心校において「主体的に「食」にかかわろうとする子どもの育成」をテーマとし、これまで行ってきた行事や栽培活動を生かした計画を立て、栄養教諭がかかわりを深めながら、より、丁寧な指導や支援をし、子どもたちが、主体的に「食」にかかわろうとするよう取り組んでいくこととした。

また、大衡村食育推進計画が策定され、今年度はその初年度に当たる。栄養教諭も昨年度よりワーキンググループの一員として深くかかわっており、村の事業とも連携した取組を行っている。取組の進捗状況を協力校や大衡村食育推進関係機関にも知ってもらっている。

1 食に関するアンケートの実施

実践中心校において、児童アンケートを6月と12月に行った。結果を分析し、今年度の実践に役立てた。また、21年度実施の結果とも比較し、教員、保護者、大衡村食育推進関係機関などに情報を発信した。特に、「就寝時刻・起床時刻」と「朝食の喫食・朝の排便・起床時の体調」に関連がみられたので、このことについてリーフレットで取り上げ、保護者地域への啓発を図った。

食に関する指導を行っていく上での課題発見や情報を共有することを目的として、実践中心校である小学校と協力校である中学校・幼稚園の職員に「食に関する指導について」の意識調査を行い、校内食育推進委員会で結果を分析し本事業のあり方を検討した。

2 実践のまとめを作成し、年度末に保護者、関係者に配布した。

今年度の実践のまとめとして、「リーフレット」を作成し保護者や関係者へ配布した。「本事業のまとめ」のほか、「早寝・早起き・朝ごはん」や「村の食育推進計画」についても掲載し、県や村の食育推進事業とも連携を図った内容とした。

数字で変化のあった事項について

1 地場産物(郡内)利用品目数が、平成20年度15品目→平成21年度18品目→平成22年度21品目と増加した。

5年生では、総合的な学習の時間の「稲作り」に関連させ、「郷土料理」や「地場産品」を中心とした活動を通して、食への関心を高めさせてきた。そのため、地場産品を給食にも多く取り入れ、指導との相互性を図ってきた。

「地産地消」を扱った授業では、地域の歴史や温かさに気づいたり、自給率や食の流通について真剣に考えたりの姿が見られ、交流給食会や収穫祭等への取り組みにも生かされていた。

他学年においても、地場産品や郷土料理に関心を持ち、生産者の方の名前を言えたり料理の名前を当てられたりする児童が増えた。

2 アンケートの結果より

児童対象アンケートの結果では「朝ごはんを毎日食べる」児童が、平成21年度6月86.4%→平成22年度6月88.3%→平成22年度12月89%と緩やかではあるが増加した。12月は起床時間が遅くなる傾向の児童が増加していたにもかかわらず、「毎日食べる」児童が減少しなかったのは、日ごろの指導の成果と思われる。

朝食の大切さについては、アンケートの結果をもとに、給食だよりなどで保護者への啓発を継続して行ってきた。また、11月に行った食育コンサートでは、低学年でも「主食」「主菜」「副菜」という言葉を覚え、朝ごはんもバランスを整えることが大切だということに気づいた児童がたくさんいた。コンサートで歌った歌のCDを給食

時間のBGMに流したり、冬に行った児童集会では保健委員会の発表で活用したり、児童の意識も継続できるように工夫した。

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

1 6年生の夏休み食育課題「私が作ったお弁当」の提出が100%であった。

6年生での「お弁当作り」を念頭に置き、教職員間で共通理解を図りながら、計画的に指導を進めた。児童は‘自分でお弁当を作れた’という自信とともに基本的な調理技術が身につく、その後の授業などでも成果が表れていた。また、お弁当を作っている姿を家族に見せることにより、保護者は子どもを見直し、励ましている様子が見られた。1人であったが、下級生を誘って一緒にお弁当を作り、自主勉強としてレポートにまとめてきた児童もあり、意欲の高まりと保護者が協力している姿をうかがうことができた。

6年生から提出されたお弁当の写真を、地域の行事や学校行事に合わせて掲示することにより、下級生は自分でお弁当が作れるようになることを6年生になった時の目標として受け止めている様子が見られた。

この実践を今後も続けていくことで、児童にとって「食の自立」に向け、大きな力になっていくと思われる。

2 栄養教諭による給食時間の学級訪問と記録。

実践中心校において、できるだけ学級訪問を行っている。担任や子どもたちとの関係が深まり、授業などもしやすくなっている。日々の献立にもテーマがあるので、学級に合わせた訪問（授業や校外学習、栽培活動に関連させた）ができる。担任から、偏食のひどい児童について相談があり、個に応じた指導もできている。記録をとることで整理され、継続した指導がしやすくなっている。

幼稚園・中学校にも毎日給食指導資料を配布し、栄養教諭が訪問しなくても、献立の意図が子どもたちに伝わるようにしている。

3 食育推進の体制の整備。

村にもともとあった食育推進関係機関と幼小中研究協議会、生産者や保護者を結びつける「校内食育推進委員会」を新たに立ち上げ、各機関との連絡調整や事業推進の手立てを探る役目として活用した。中心校における事業の概要や進捗状況等を報告し、他機関で行っている食育推進の状況も把握でき、また、そのことで刺激を受け更に活動が深まる等、連携して事業を行うことができた。児童アンケートの結果を村で活用したり、保護者の意識調査を村で実施してもらったりと、情報の共有もできた。

校内食育推進委員会を開くことにより、教職員間でも共通理解が図れ、食育に対する意識も高まった。栄養教諭が中心となることで、教科間や学年間の活動が掌握され、給食時間や委員会活動等にも反映することができ、行事や授業で行ったことをその場で終わらせず、他の活動により繰り返し指導されるようになったり、職員の方から栄養教諭に授業案を持ちかけられる等協力体制が整った。今後、本事業での実践が継続されるよう、この体制を活用していきたい。

今後の課題(今回の事業により新たに目立った課題など)

食育についての職員意識調査において、実践中心校では「来年度以降も今年度の実践の継続」が多く、協力校では「積極的に取り組むべき」が多かった。中心校での活動をこなそうとすると、協力校での時間の確保が難しくなる。指導資料の配布などで補ってきたが、実際に現場で指導する必要性を感じている。協力校では、年1回ずつの食育指導の計画があるので確実に実践していきたい。

また、食育を推進していく上で重要なことは「時間の確保」「保護者の理解と協力」「関係職員の連携」「効果的な指導方法に関する情報」という結果が出た。この部分について今後どう解決していくのかを校内食育推進委員会で話し合いながら、継続した活動をしていきたい。

本事業から見えた「教科・学年・行事等の関連」と「食に関する指導の6つの目標」に鑑み、本校「食に関する指導の全体計画」の見直しを図るとともに、本校テーマに迫っていきたい。

本校食育推進委員会と村の食育推進組織の連携と維持を今後も図っていきたい。